

ふくいミュージアム

1996.3.31

No.29

福井県立博物館



夢楽洞絵馬の復元 [市原野月眺(袴垂保輔)・明治7年(1874)奉納]

福井の生んだ奇才・浮世絵師

夢楽洞万司の世界

～江戸後期の民衆文化～

プロローグ「夢楽洞」

「夢楽洞」は、江戸後期から明治・大正期にかけて、福井の町で絵馬や天神掛け軸などを製作・販売した工房かつ店舗であったと推定されます。その店は、福井城下の北西端、旧北陸道に面した小田原町(現、田原町松本通り)に構えていました。

明和～寛政期(1764～1800)に活躍した初代絵師(万屋曾平)以降、およそ4～5代にわたり「夢楽洞万司」の画号を受けつぎ、絵馬や天神画などに肉筆の浮世絵を描きつづけたのです。明治初年の段階では、絵草紙の販売も手がけていたようです。

初代、万司仙人と雑俳

夢楽洞の初代絵師は、「万司(大)仙人」の号を名乗り、当初は雑俳の選者(宗匠)として活躍しました。雑俳とは、江戸中期にうがちや滑稽、パロディーを楽しむ娯楽本意の俳諧として人気を博したものです。宝暦・天明期(1751～88)には、江戸で「川柳」が選者となり、前句を出題して付句を応募する万句合の興行が流行しました。万司仙人も、これとほぼ同時期に越前で雑俳句合を興行していたのです。

万司仙人は、この世はつかのまの夢で、どうせ夢なら「あほう」になって楽しむ方がよいという、「夢楽」の発想を売り物に、みずからマルチタレントであることを誇っていたようです。

絵馬を掛けまわる

雑俳の選者であった万司仙人が、絵馬をかきはじめました。安永期(1772～80)にその数がふえはじめ、馬図のほかに、「富士野の巻狩(曾我物語)」や「鞍馬天狗・橋弁慶」などの物語図もみられます。絵解きをするように複数の場面が描かれていて、まるで絵本の挿絵をみるかのようなのです。

寛政期(1789～1800)には、万司仙人の絵が一段と上達します。その後、「万司仙人」の号は、「万仙」～「仙家」と変わり、作品の完成度もしだいに高くなっていきます。

春の特別展 96.4/25(木)～6/23(日)

Art of Murakudō-Manshi

～Culture in Fukui～

絵馬工房

享和期(1801～03)に入ると、二代万司が登場します。この時期になると、万司は雑俳から離れ、絵師に専念するようになりました。そして、文化・文政期(1804～29)には、工房での絵馬の大量生産が本格化したようです。型紙の使用の跡や、構図の固定化がそのことをよく物語っています。

さらに、天保期(1830～43)以降には、複数の絵師による製作集団が形成されていったようです。絵馬の需要の増加とともに、工房の発展ぶりがうかがわれます。

夢楽洞絵馬の復元 ～板上の錦絵～

1～2世紀の歳月を経て、現存する夢楽洞絵馬は、顔料の変色・剥落がかなりすすんでいます。これらが製作・販売されたころには、どのような色彩を放っていたのでしょうか。ここでは、夢楽洞の絵馬を復元してみます。木版の錦絵にも劣らぬ極彩色の鮮やかさに、往時の人気の理由が実感できることでしょう。

また作品の絵馬は、高所に掲げて眺めるものにもかかわらず、髪の毛の一本まで乱れることなく、たいへん緻密に描かれています。これにも驚かされます。

夢楽洞絵馬の普及

夢楽洞の絵馬は、人びとの移動にともない流通・普及したものと考えられます。その多くが、何らかの事情で村を離れた者が帰郷にあたって奉納しているのです。寺社参詣や物見遊山、出稼ぎ・奉公、戦争動員、移住など、出立の理由はさまざま考えられますが、いずれにしても帰村の報告儀礼に絵馬を奉納することが流行したと思われるのです。

その行為は、無事に帰還できたことの感謝の意を表すと同時に、「郷里へ錦を飾る」といった意味あいを持っていたと解釈されます。

「まんし天神」

夢楽洞は、天神掛け軸の製作も手がけていました。「まんし天神」と呼ばれ、上半身を大きく描くことに特徴がありました。たいへん大胆な構図で、寛政期に流布した写楽や歌麿の役者絵・美人画の大首絵の手法に酷似しています。小指を立てていることも特徴的で、これも歌麿の美人画によくみられる描法です。

江戸の浮世絵版画の影響を受けて成立した「まんし天神」は、天神画としては型破りの作でした。このいかにも風変わりな天神様が往時の人びとの心をとらえ、絵馬とともに大流行したようです。

夢楽洞の店舗の復元(推定)

ここでは、幕末から明治初期の状況を想定して、夢楽洞の店舗の推定復元を試みます。大小種類も豊富な絵馬、大首絵の天神掛け軸、絵本など、極彩色の商品が客の目を引くように配置されていたでしょう。店に立ち寄り、肉筆浮世絵師とも呼べる夢楽洞万司の世界を少しのぞいてみませんか。

— その他 —

そのほか、会場には、〈体験絵馬の重量〉〈絵馬を担いで帰る旅姿〉〈「まんし天神」を掲げた天神講の床の間〉など、いくつかの体験・復元コーナーを設ける予定です。

総覧「まんし天神」

現存する「まんし天神」をできるだけ多く紹介するために設けるコーナーです。大首絵にもさまざまな図柄があり、絵師による個性のみられることがわかります。またここでは、「まんし天神」に関する情報収集を行いたいと思っています。



夢楽洞絵馬の部分拡大

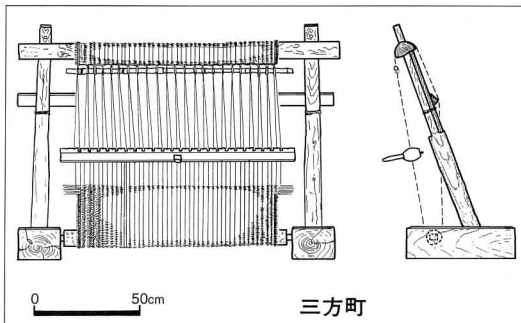


研究ノート

福井県に伝わる在来^{むしろばた}筵機

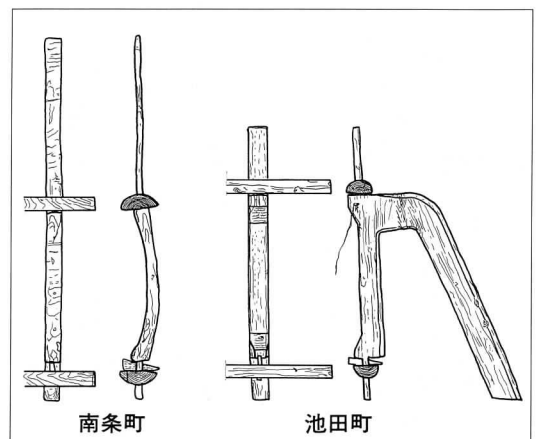
わらの製品にはニゴを切っただけのものから、手の込んだ飾りものまであります。その多くはあまり道具を使わずに作ることができますが、代表的なわら製品の筵は、効率良く作ろうとするかぎり大がかりでやや複雑な装置、筵機が必要です。筵が一種の織物で、^{なて}経の縄が常に一定の力で張ってあること、^{よこ}緯のわらをヒ(杵)で打ち込むことが必要だからです。近代になると新しい装置が発明され普及しますが、地域ごとの在来の筵機も伝えられていました。

筵機では経縄をほぼ垂直に張ります。ヒがカシの木でつくられていて 2kg以上の重さがありますから、緯わらをしっかり打ち込み、しかも経縄に無用の負担をかけないためには縦に張らざるを得ないのです。また、筵の長さが通常1.8m程度ですから、上下に経縄を掛ける桁を渡して円環状に縄をかけます。経縄がたるんでいるときちんとした筵を織ることはできません。しかし織りが進むと布織りで巻き上げをするように、経縄の張りをゆるめて緯わらの打ち込み位置を変えなければなりません。以上の作業条件は筵機の形としては、①桁を支える柱を立てる、②上下の桁を柱にとりつける、③経縄の張りを強くしたり緩めるための装置をつける、ことになり、さらに④緯わらを柱にじゃまされずさしこみやすくすることも必要です。筵機にとって基本的なことですが、実はこれらが地域差の指標になるほどの違いがあります。県内の在来の筵機には大まかに見ても5種類があります。それらを概観し、それぞれの意義を考えてみましょう。なお、図は三方町の資料だけ正面も描いてありますが他は側面を主としています。



まず柱の立て方を見ましょう。三方町の資料は大きな土台があり、柱は前傾して立てられています。和泉村の資料は大胆に削りこんだ土台に柱を立てます。これらは柱と土台のほぞ組、土台の重さで筵機全体が単独で立つようにしています。ところが他の3つの資料は土台がありません。南条町と北谷の資料は柱の頂上を別の構造物にとめることで立たせています。そのために図に示すように上の桁をはるかにこえてほぞが長くのびています。この部分が短いと後ろから筵機を支える台の腕を手前に長く出さない限り、上の桁の巾にじゃまされてまっすぐ立つことができません。縄でしばりつけるのが大部分のようですが、北谷の資料の中には柱の頂上をほぞにして、支持する台(この場合は小屋や住居の桁という方が正確だと思います。)とほぞ結合にした物さえ見られます。全国的にみると、土台を持つものの方がはるかに多く、土台のないものは分布が限られているようです。池田町の資料は木の股の部分を使い、後ろに控え柱をだすという特異な柱の立て方をしていますが、他の観点から南条町の資料の特殊な変化と考えられます。図の資料は太いケヤキで作られ、柱と控え柱の間隔も広く堂々とした作りですが、池田町に収集されている資料には控え柱がごく細いものや、ほぞさしにしたものさえあります。木材資源が豊かな中で独自に発達し、広まったものといえると思います。

次に桁の渡し方を見てみましょう。まず大きく違うのが北谷の資料です。他の4資料は柱の上の方をほぞにして桁を貫いていますが、この資料は逆に桁の両端をほぞにして柱のほぞ穴に差し込んでいます。



この組立方は俵編みの台と同じですが、左右に分離しやすいという問題をもっており、筵機では今のところこの地域のものしか見ておりません。

次に気がつくのは、土台の有無による下桁の組み方の違いです。土台のない資料は柱の下端もほぞにして桁を貫いています。土台をもつ資料では下の桁は土台にほぞ穴を作り、桁の端を差し込んでいます。不完全な資料のため今回の報告では紹介していませんが、和泉村の資料館には左右の土台と下の桁を一枚から彫り出したものが収集されています。(この場合、土台は奥行きよりも左右が長くなりますが。)土台をもつ筵機では、土台は柱だけでなく桁も支える機能を持っていたことがわかります。

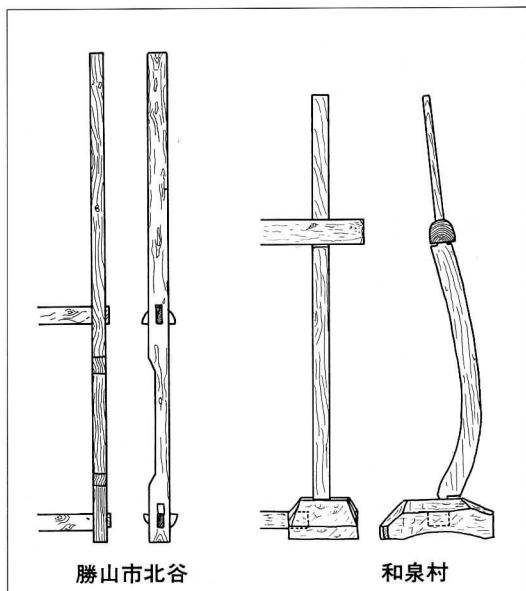
経縄に張りを与える方法も土台の有無により大きく違ってきます。南条町・池田町の資料は柱下部のほぞは桁の穴に比べてかなり細く作られています。このため桁は経縄の許す範囲で自由に上下に動くことができます。桁の重さで経縄に一応の張りが与えられますが、ヒを動かしても桁が上に動いて縄がゆるまないように楔をさしこんで桁を押しえつけています。柱下部のほぞの中央のスリットは楔を挿し込むためのものです。北谷の資料は柱のほぞ穴が桁のほぞより上下に長く作られていて、やはり桁が上下に動くことができます。桁の固定に、前から差すか横から差すかの違いはありますが楔を使うことも同じです。これらでは下の桁が経縄の張りの調整の機能

も持っているのですが、土台をもつ資料では下の桁は調整機能をもっていません。桁の端が土台に差し込まれていてほとんど動かないためです。三方町の資料では、その代わりに柱の後ろ、経縄との間にはさんだ棒が使われています。この棒の位置を変えることで張りを調節しているのです。

最後に柱の湾曲の点を見ます。三方町の資料では柱自体を大きく前傾させているために柱を湾曲させる必要がありません。南条町の資料は深い湾曲を示しています。柱は一枚から彫り出していますから意外なほど太い材料を使ったこととなります。北谷の資料は角材の手前側を浅く削り込んだだけで、しかも左右一方の柱だけを削っています。全体の組立方がいい、柱の木取りといい、南条町の資料によく似ていながら独自の作りが目につきます。

池田町、北谷の資料はそれぞれの地域でしか見られないようですが、三方町の資料は嶺南に広く分布していると思われます。このタイプは西日本各地に見られ、しかも朝鮮半島にもそっくりのものがあるからです。南条町の資料は土台がなく湾曲した柱を持つことが特徴で、嶺北の平野部にごく一般的に見られるもので、嶺北型ないし北陸型と呼ぶ方が適切かもしれません。新潟県十日町市ではほぼ同じものが使われていましたが、全国的に見ると分布域が狭く、発生も新しいのではないかと思われます。江戸時代の後期、小松市の近くの農村を描いた『民家俵図』のなかの筵機はやや小さい土台に柱が直立していますが、左右の土台をつなぐ桁と別に経縄をかける下桁をわたしています。これと同様なものが勝山市西部の眞産織りでも使われてきました。これらは土台を取り去れば嶺北型と基本的に同じ作りになるはずですが。

紙幅の関係でおおまかに記述しましたが、筵機は他の文化事象と同じように嶺北・嶺南の違いがあり、さらに日本海沿岸中部に独自の型を発達させていることが予想されます。このような分布が筵機だけで完結するのか、他の文化事象とも関係しているのか今のところわかっていません。まだ少数の例しか見ておらず、より広範囲の資料の比較も必要です。今後もお教をいただければ幸いです。(坂本育男)



コラム

モンゴル高原 国際恐竜調査紀行

1995年6月、日本はこれから梅雨に入ろうとするころ、私は大陸の乾燥した空気を吸い込み北京空港に降り立ちました。昨年からはまった日本・中国・モンゴルの三国共同による恐竜化石発掘調査に、日本隊の一人として参加することができたからです。

この調査の地域は、中国とモンゴルの国境地帯に広がるモンゴル高原で、恐竜化石を中心に発掘調査しようと始まったプロジェクトです。昨年は、初年度ということで中国内モンゴル自治区の国境地域で予備調査を行うことになりました。

モンゴル高原で始まった共同調査には、中国科学院古脊椎動物古人類研究所の董枝明教授を団長とする7名の中国隊、そして日本からは私を含め団長の県立博物館の東洋一と、おもに小型ほ乳類を研究されている国立科学博物館の富田幸光博士ら4名が参加しました。予備調査ということで車での移動が長距離に及ぶことが予想されたため、両国あわせて11人という小規模な調査隊となりました。

6月18日、北京で中国隊と合流。その後、内モンゴル自治区の首都であるフフホトへ行き、そこで調査の打ち合わせや準備にとりかかりました。そして23日に、食料、燃料、発掘道具などをジープ3台に詰め込みモンゴル高原へと出発しました。最終目的地の敦煌まで、モンゴル高原そして砂漠の道なき道



化石を求めて歩きつづける隊員



日中両国調査隊のテント基地(バインマンダフ)

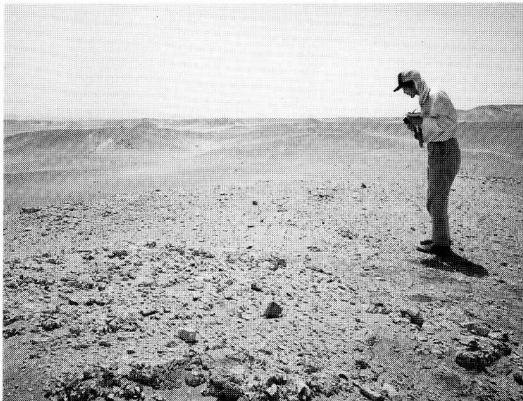
を走ったのです。

最初の調査地点であるバインマンダフで調査をおこなったのは出発から二日後でした。この地は数年前、中国・カナダの共同発掘調査隊が数多くの恐竜化石を発見し、すばらしい成果をあげた場所です。今回、私たちも恐竜の卵や肉食恐竜化石、そして小型ほ乳類の頭骨を含めた沢山の化石を発見することができました。

調査隊はさらに西方にジープを進め、28日、スウフントウの北方に到着しました。ここは、今までにどこの国の調査隊も入っていない古生物学としては未踏の場所と言えます。「本当に化石が見つかるのか？」だれもが不安な気持ちでいっぱいでした。それでもひたすら恐竜の骨を求め砂漠をさまよいました。ふと、持ってきていた湿温計をみると、気温52℃、湿度は20%を切っています。目を疑いました。そんなとき、「恐竜骨化石発見。」の声が響きわたりみんなが集まりました。こんもりと丘になっている地表には骨化石が散乱しています。さらに観察すると、丘の下には全身に近い骨格が埋まっていると思われたのです。続けて付近を調査すると、同じ地層で同じように地表に骨が散乱した丘を十数個見つけることができました。全隊員、日焼けで真っ黒な顔に満面の笑みを浮かべていました。

この日の成果は、今回の予備調査において最大の発見と言え、三国共同発掘調査は幸先の良いスタートを切れたわけです。調査隊一行は、スウフントウをあとにして、予備調査はさらにモンゴル高原を西方へ移動しながら続けられました。

7月6日、ジープで14日間もの間モンゴル高原を



地表に散乱している恐竜化石(スウフントウ北方)

走り回り、やっと敦煌に着きました。町が見えたとき私はホッとしました。シルクロードを旅した昔の貿易商人たちの行程は、私たちよりもっと厳しかったに違いありません。町並みが見えたときの気持ちは計り知れないものだったでしょう。私は、その貿易商人たちの気持ちが少しでもわかったような気がしました。フフホトを出発して敦煌に到着するまでの走行距離は、4,000kmに及ぼうとしていました。途中、悪路のため体が飛び跳ねジープの天井に何度も頭をうちました。またジープのドアが布製のため、隙間から入ってくる砂ぼこりに困ったことなど苦労の数々が思い出されます。

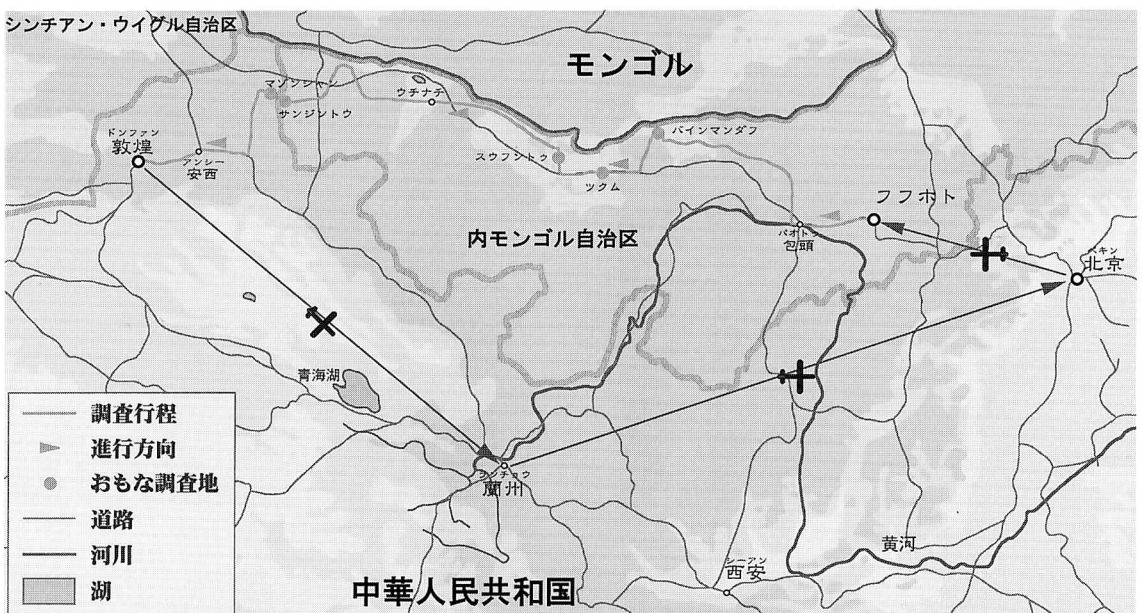
また、1億年以上も前には植物が覆い、色々な生物が存在していたのでしょう。しかし、今ではその土地も見渡すかぎり岩が露出し、乾いた大地となっている現実を見ました。「自然」というものの中で、人間の無力さをひしひしと感じた約1カ月の中国滞在となりました。

今回の予備調査全行程において、恐竜化石が十カ所近くに及ぶ場所で確認できました。また、今後どのような準備をし、どのような方法で発掘をしなければならないかという具体的な事も考えることができるようになってきました。

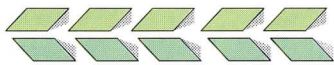
調査が終わって数カ月たった今、窓の外に雪舞う県立博物館にいて、私は乾いた空気の中で揺らめく山並みの遙か向こうまでなだらかに続く大平原、あるいは砂漠をなつかしく思います。そして、夜にはまばゆいばかりの満天の星空も忘れることができせん。

調査は始まったばかりです。今後続く三国共同の恐竜化石発掘調査が大きな成果を上げることができ、そして、無事成功することを願いたいと思います。

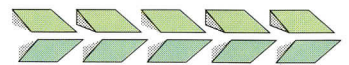
(川越光洋)



調査行程



友の会会員募集



当館の友の会は、開館の翌年(1985年)に当博物館のよきサポーターとして発足しました。それ以来、すでに11年を経過しましたが、その間、各地の史跡や博物館・資料館への研修旅行をはじめ、会誌「My ミュージアム」の発行等を行ってきました。

さらに、昨年秋に行った研修旅行では臨時の総会を開き、今後これまでに以上に、会員各位の積極的な参加型による友の会活動を行っていくよう、方針を決定しました。現在は、代表の方々に印刷物等の発送を行ってもらったり、春の特別展のミュージアムショップを予定したりと、新しい試みを行っています。今後さらに多くの活動を、会員自身に行ってもらおうと考えています。

このように、今まで以上に友の会活動が博物館の運営と身近なものになってくると思われしますので、この際お友達とお誘い合わせのうえ、ご入会ください。

なお、友の会入会の特典とその要項は下記の通りです。

◆こんな特典があります◆

- ・博物館と友の会の行事をもれなくご案内します。
- ・常設展示を何度でも無料で観覧できます。
(家族会員は1度に4名まで)
- ・特別展は1度無料で観覧できます。
(家族会員は計2名)
- ・研修旅行・見学会に参加できます。(有料)
- ・友の会会誌「My ミュージアム」をお届けします。
- ・館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

◆会費(1年分)◆

一般	2,500円
大学生・高校生	2,000円
中学生・小学生	1,000円

家族	5,000円
賛助会員	(一口)10,000円

◆期間◆

1996年 4月 1日～1997年 3月31日

◆入会方法◆

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ会費を次のいずれかの方法で入金してください。

- ・直接、博物館内友の会事務局へ
- ・お近くの郵便局から郵便振替で(申込書は別送)
口座番号 金沢5-23379
加入者名 福井県立博物館友の会
- ・現金書留で郵送(申込書を同封)

◇入会手続き終了後、会員証をお渡しします◇



研修旅行(京都府加悦町古墳公園)



研修旅行(京都府立丹後郷土資料館)

ふくいミュージアム
No.29
1996. 3. 31発行

編集発行 福井県立博物館
福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
株式会社エクシード
印刷

